

森立之の生涯 2

今回は、立之の出生から伊澤蘭軒に入門するまでを見た。この時期は、文化・文政期にあたり、江戸を中心に出版文化が隆盛し、その中心となったのが医家であり、幕府がその後押しをしたという状況があった。

こうした状況をもう少し詳しく見るべきだが、目下はお盆の時期でもあるので、今月はやや話題を和らげたい。

森立之や伊澤家の人々も勉学の人であると同時に、実生活をも持っていたのであるから、そうした人間的な面を見てみたいと思うのである。そうすることで、江戸時代のなじみのない学問をしていた人々に対して、もう少し親近感が持てるのではないだろうか。

さいわいに森鷗外は、歴史上の人物が、何にどれだけの金を遣ったかということ、何が好物であったか、ということを詳しく書きとめている。今回は、彼らの人となりを知る上で、好物を中心に見てみたいと思うのである。

伊澤蘭軒の死・・・森鷗外「伊澤蘭軒」より

文政十二年三月十七日 蘭軒没(53) 墓は麻布の長谷寺。

蘭軒夫妻、常三郎は同一の熱性病に罹つたらしい。柏軒も頭髮みな脱す。

これより先、蘭軒は三十七歳のころより足痛を患い、家中では移動の際には、座布団に乗り、それを弟子に引かせた。

● 蘭軒没後は、^{しげん}榛軒が伊澤家を継いだ。

● 蘭軒の側室さよには、榛軒が^し貴を与えて、人に嫁せしめた。

● 榛軒の世となつてからも、^{ぎくそう}醫を学ぶものが伊澤の門に輻湊したことは変わりがなかった。それを現す俗謡「醫者になるならどこよりも、流行る伊澤へ五六年、読書三年匙三月、薬剉(きざ)みや丸薬や、頼もうどれの取次や、それから諸家へ代脈に、往つて鍛ふが醫者の腕、それを爲遂げりや四枚肩(四人かつぎの籠、速かつたので医者に使われた)」

榛軒信厚(良安) 經學師…狩谷椴齋、松崎^{こうどう}慊堂

医学…蘭軒、多紀^{たけ}莚庭、辻本^{つじもと}崧庵、田村元雄

妻勇、離縁される。

継妻志保

女^{むすめ} 柏^{かえ} 曾能子^{そのこ} 刀自…鷗外と交わりがあった。

柏は池田^{きよすい}京水の七男全安を婿に迎えるが、間もなく離縁する。全安が広く医術を極めず、痘科と瘧科のみを専らとしたため。離縁したのち、柏は遺子梅を生む。

●当時の伊澤家の新年發会、午前より夜まで來會者は百人を数えた。

・その昼の献立

摘み入れの吸物、小蕪、椎茸、平昆布、鱧、鱈、千六本貝の柱、猪口はりはり、鮭粕漬の焼き物。

・夕の献立

牡蠣海苔の吸物、口取り蒲鉾、卵きんとん青のりをまぶした牛蒡

鯛の小串、刺身平目鮓、大平鯛麵、旨煮烏賊牛蒡うど。

宴の終りには決まって総踊りが行われ、全員が起つて踊つたので、床板がしばしば踏み破られた。

●毎年十二月二十日には朝から屠蘇を調合した。柏軒、外弟子も来て、調合の室には女子の入ることは禁ぜられた。幕府と阿部家に献上するものは、朱印を捺して別とした。これが終ると柏軒が神田大横町の蕎麦店今宮^{いまみや}へ皆を具して蕎麦をふるまつた。その数三十人ばかり。その後神田明神に行き、夫々が三十二文の玩具を買つて、伊澤家への贈り物とした。

●毎月一、六日は躰壽館で書を講じた。門人の柴田常庵、柴田修徳、高井元養、島村周庵、清川安策、雨宮良通、三好泰令などは、午の弁当を持参して随従した。

●毎月九の日は、自宅で医書を講じた。

●病家は選んで訪問した。「大名と札差の療治はせぬことだ」努めて貧家を選んで回つた。札差を嫌つたのは豪奢の家が多かつたからだが、大名もやむを得ず訪問した家もある。旗本伊澤家は、榛軒にとって総本家だったが、敢えて訪問しなかつた。

●「己は柏^{かえ}のために金を遺してやることはできない。よしできるにしても、金を遺すことは兎角^{むぎわ}殃ひを遺すと同じことになる。その代わりに己は子孫に陰徳を積んでおく。朋友の困窮を救い、貧人の療治をしたのはこの意より出た。

●榛軒は、早晚致仕(隱居)して貴顕との交わりを断ち、小刀と若党ひとりを入れて、貧人の病を問うことにしようと言っていた。

●俳優は河原者として賤民であったが、多くの醫家は往療したが、榛軒は例に倣って往かなかった。「立派な腕のある医者が幾らもあつて見に行つてやるのだから、何も己が往くにはおよばない」ただ、七、八代目市川団十郎の病んだ時だけは往つた。人格も卑しからず多少文字も識つていたから友人として遇した。

●榛軒は蓮を愛した。丸山の家は池を穿つことができないので、大瓦盆数十に水を湛えて蓮を植えて愛玩した。

●榛軒は蘭軒の本草趣味を伝え、また立之に勧められて多く薬草を栽培した。またこれも立之と同様に、門人を従えて近郊に採薬に出た。書齋と客間に挿し花を絶やさなかった。

●榛軒は豚肉を好んだ。(抽齋は津軽に行つて後、好んだ當時はまだ豚肉を忌む者が多かつたので、珍肴だつた。ある日薩摩屋敷の訳官能勢甚十郎という者が榛軒に豚を贈つたところ、榛軒が家に居なかつたので、妻の志保は早計して飯田安石にこれを棄てさせた。榛軒が帰宅して珍肴を失つたことを惜しんだので、志保は安石に拾つてこさせた。榛軒は志保が忌むことを知つていたので、庭先に焜炉を焚いて肉を煮て、塾生とともに大いに喰らつた。

●榛軒は午餐あるいは晚餐のために抽齋の家に立ち寄ることがあつた。その時抽齋の妻五百の姿を見る前に、玄関で大声で呼ぶのを例とした。「また二厄介になります。鰻は逃げて置きました。もう一件往つて来ますから、お粥は米から願います」五百に炊かせた粥に蒲焼を添えて食うのが榛軒の適とする所であつた。この時、榛軒は抽齋の読書を妨げるを欲しなかつたので、五百をして傍に在らしめ、抽齋は書齋に退かした。

一男・常三郎は生まれて間もなく失明、而加、病弱で物学びもできなかった。

文政十二年二月没(25)

澀江抽齋の食習慣・・・森鷗外「澀江抽齋」より

- 澀江抽齋は津輕藩の醫官で、生涯にわたって森立之の親友であった。立之より二歳年長。

抽齋は病を以て防ぎ得るべきものとしたうえで、常に養生に心を用ゐた。

飯・・・朝午各々三碗、夕二碗半

嘉永2年、藩主津輕信順が抽齋のこの習慣を聞き知り、家来に命じて飯碗を作らせて下賜してからは、このやや大きい碗のみを用いた。婢をして飯を盛りしむるとき

は、過不及を免れぬため、妻五百をして小さい櫃に取り分けさせ、櫃から碗に盛りしめた。朝の味噌汁も二碗にかぎつた。

采蔬は最も菜菔を好んだ。生・・・大根おろし、煮・・・ぶろふき。大根おろしは汁を棄てず、醤油などをかけなかつた。濱名納豆は絶やさずに置いて食べた。

魚類では方頭鯛の末醬漬を嗜んだ。鱈も喜んで食べた。鰻は時々食べた。

間食は殆ど全く禁じていたが、稀に飴と上等の煎餅とを食べることがあつた。

少壮時代には毫も酒を飲まなかつたが、天保8年に三十三歳で弘前に往つてから、防寒のために飲み始めた。一時は晩酌の量が多かつたが、安政元年に五十歳になつてからは、猪口に三つを酌えぬようにした。猪口は五百の実父の贈つた品で、宴に趣くにはそれを懐にして家を出た。

鰻を嗜んだ抽齋は、屢鰻酒と云ふことをした。茶碗に鰻の蒲焼を入れ、些しのたれを注ぎ、熱酒を湛へて蓋を覆つて置き、少選してから飲むのである。五百が少しの酒に堪へるので勸めてこれを飲ませた。五百はこれを旨がつて、兄榮次郎と妹婿長尾宗右衛門とに侷め、又比良野貞固に飲ませた。此等の人々は後に皆鰻酒を飲むことになつた。(六十二 六十三)

比良野貞固(津輕藩江戸留守居役)

- 山内氏五百は神田紺屋町鐵物問屋(日野屋)山内忠兵衛妹で、表向きは、弘前藩目付役比良野助太郎妹ということにして、澁江抽齋と婚姻し、四人目の妻となった。

朝餉の饌には必ず酒を設けさせた。殺には選嫌をしなかつたが、のだ平の蒲鉾を嗜んで、闕かさずに出させた。これは贅澤品で、鰻の丼が二百文、天麩羅蕎麥が三十二文、盛掛が十六文するとき、一板二分二朱であつた。

※一分 \equiv 1/4両、一朱 \equiv 1/4分。嘉永3年当時、一両 \equiv 六千四百文、二分二朱は四千文にあたる。

伊澤榛軒継妻志保

天保2年 榛軒、妻・横田氏勇を去る。蘭軒未亡人・正宗院によく尽くさなかつたため。翌年、後妻・飯田氏志保³³を娶る。

■飯田氏志保(もと梅)・・・大坂の商人が、信濃の国諏訪神社の神職の女を娶つて一女を挙げた。この女は長じて京都の典薬頭の婢となるが、典薬頭の嫡子はこの婢と通じ、婢は大坂に帰つて梅(志保)を生んだ。

梅の父は、武蔵野國川越から養子を迎えて、これに梅の母を配した。梅の母はさらに二女を生んだ。るゐ、松。

梅の一家は江戸に出たが生計に困窮し、梅は木挽町の芸妓となった。異父妹のるゐは浅草の蓮光寺に嫁し、松は川越の中村某の養子になった。

●ここで梅は芸妓を廃し、名を志保と改めて、継父とともに浅草・善照寺隠居所に住んだ。

●志保は芸妓を辞めたあと、長門の國萩藩の留守居役綿貫権左衛門に嫁した文政六年 初婚。ここで志保は一子を上げる文政七年、綿貫とは故あつて別れ、その子を練馬村内田久右衛門(里子)に遣つた。数年後、志保はこの子に母方の飯田氏を継がせた。この子が飯田安石である。

●安石十二歳にして榛軒門人となる(天保六年)。

●ある日病んで、治を伊澤氏に請うた。これが榛軒の志保を見たはじめて、やがて榛軒は志保を娶ることになった。

●天保十三年九月、小嶋寶素が京都へ往くとなつたとき、志保は、自分の生父が誰であるかを尋ねてくれと頼んだが、寶素は果たせなかつた。

大塚(高)

振訪神社の女

中央東頭(高)

巻子某 (川越あり)

京都東頭(高)

梅(高志保)

子わ 武尊連光季に嫁

敏田氏

松 巻子に嫁 川越の中打某

異父妹二人の行末如
沐て、昔妓を殿し、名を志保と
改め、継父と武尊に住ん

安石に感時、
榛軒に入門

御食権左衛門と別離
のち榛軒の妻となる

御食権左衛門
(女親藩士)

敏田安石

内田久左衛門(鎌馬)へ
里子に出りぬ、
母方の敏田氏を継ぐ者

江戸、木挽町の昔妓